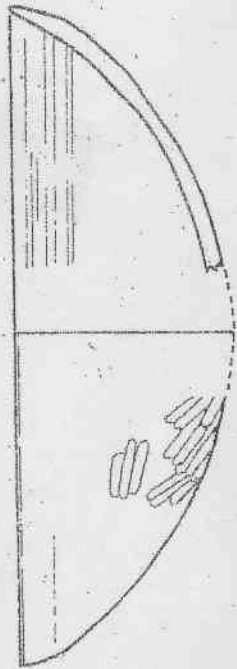


宮城県栗原郡高清水町小山田 荻生田

下田遺跡 発掘調査概報



昭和49年4月

高清水町教育委員会

212

212



宮城県東部高清水町下田遺跡所在地 1/5万

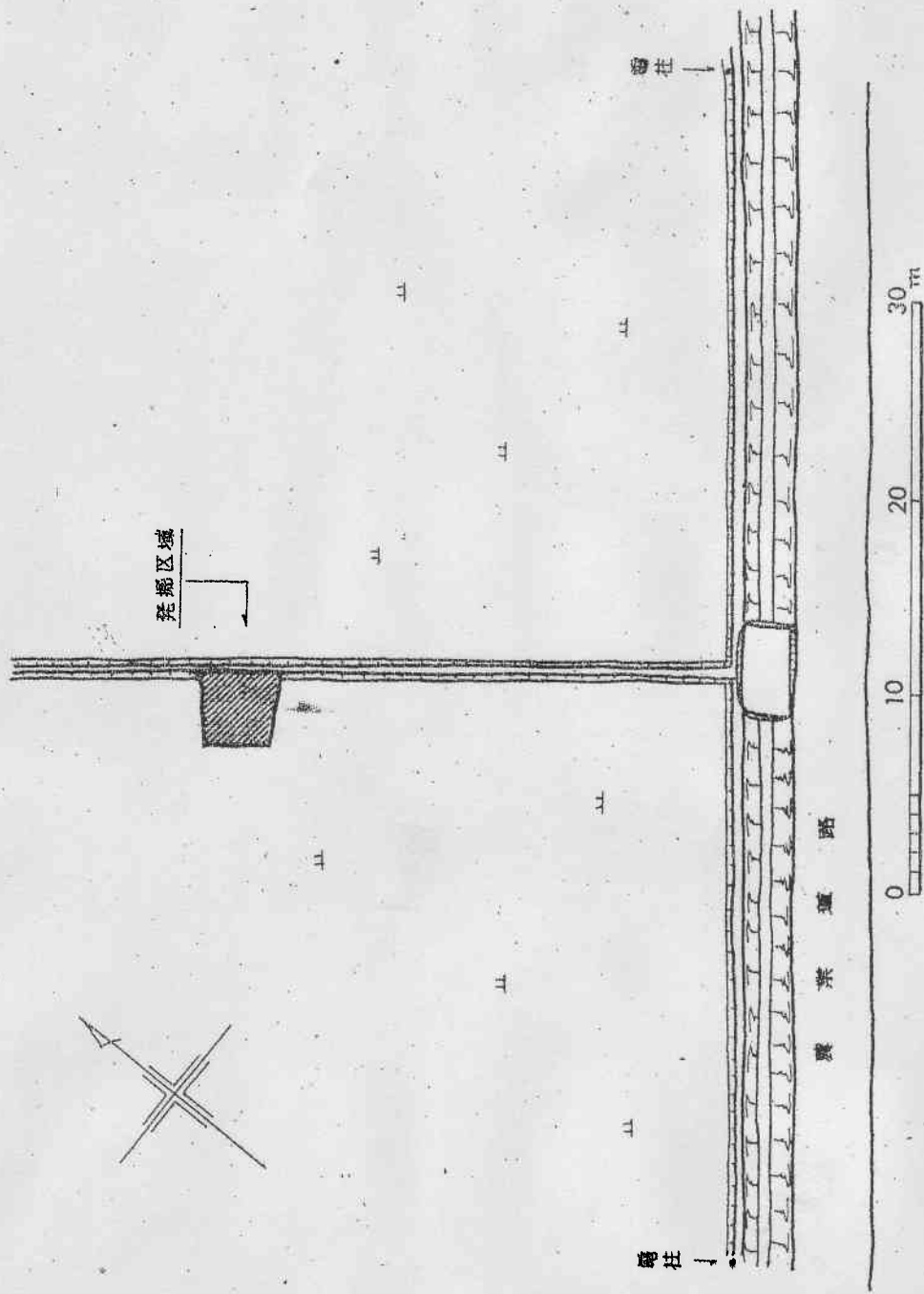




岩出山町

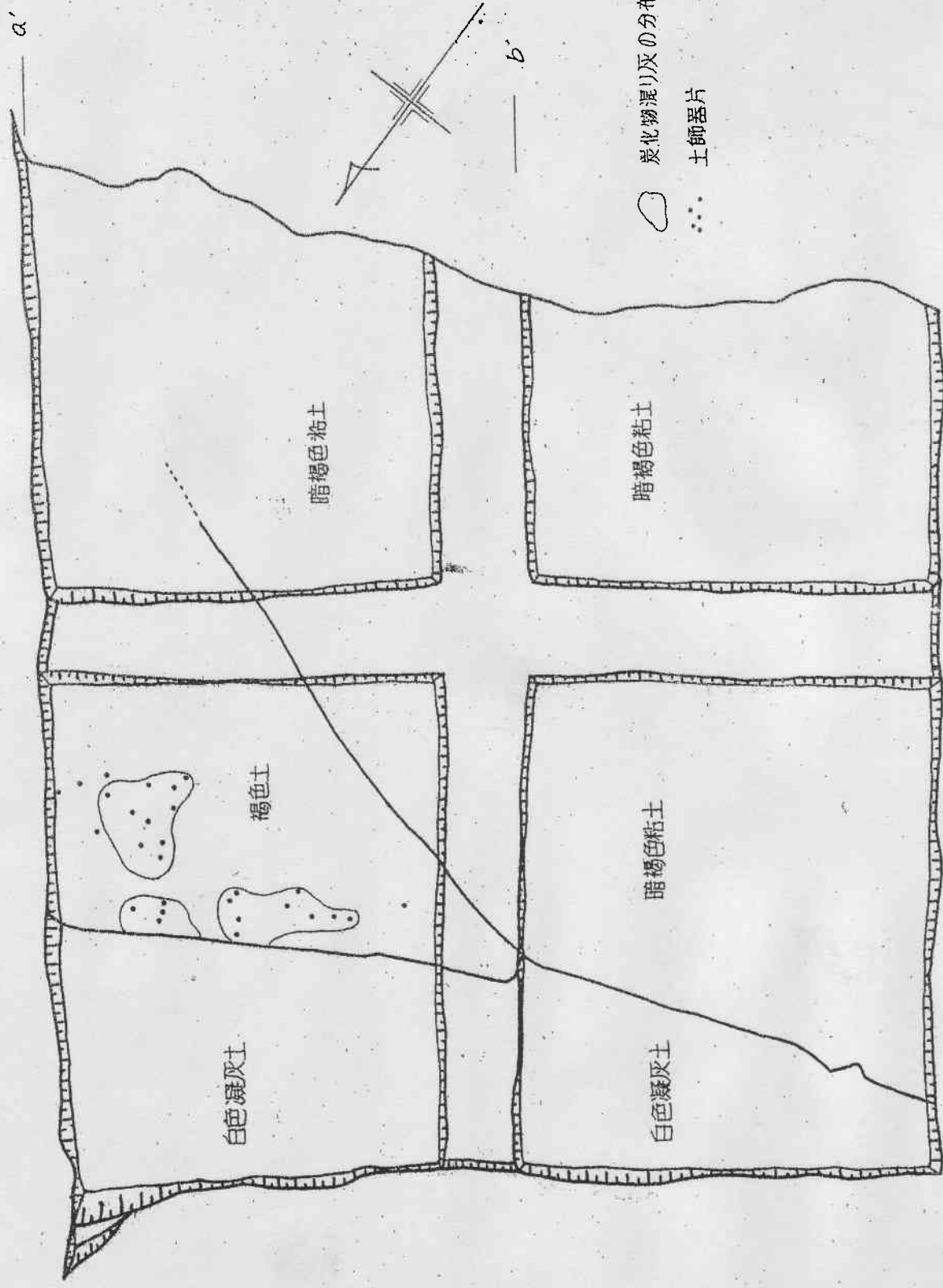


1 km



宮城県栗原郡清水平町小田字萩生田下田4番地 下田遺跡発掘調査地点位置図

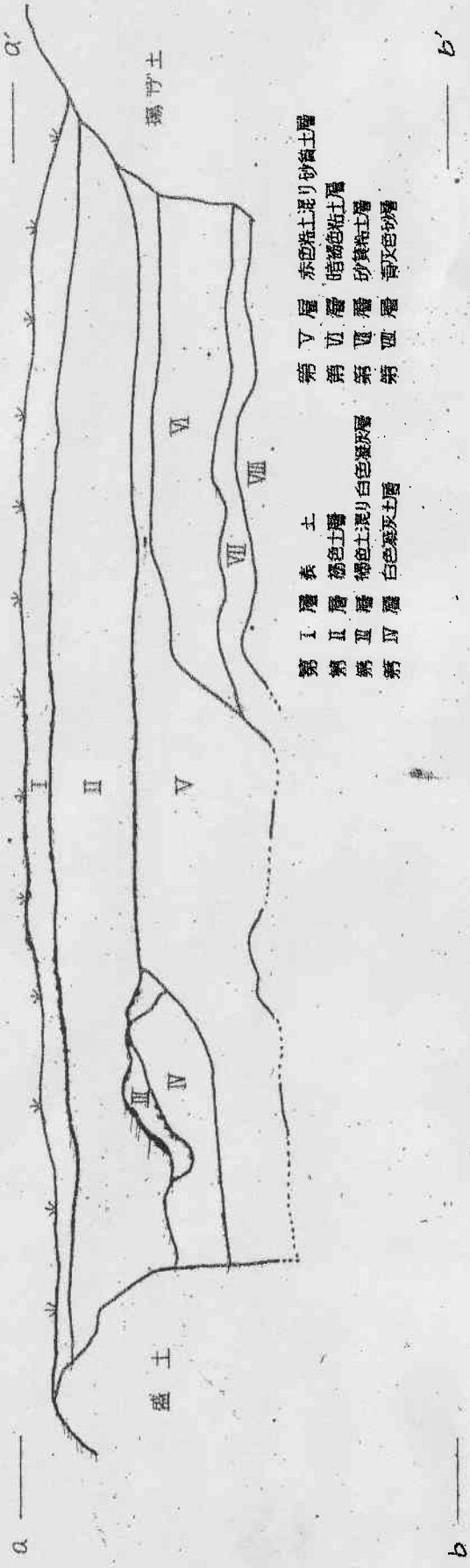
MIYAKE & MORIYA 1974. 4. 5.



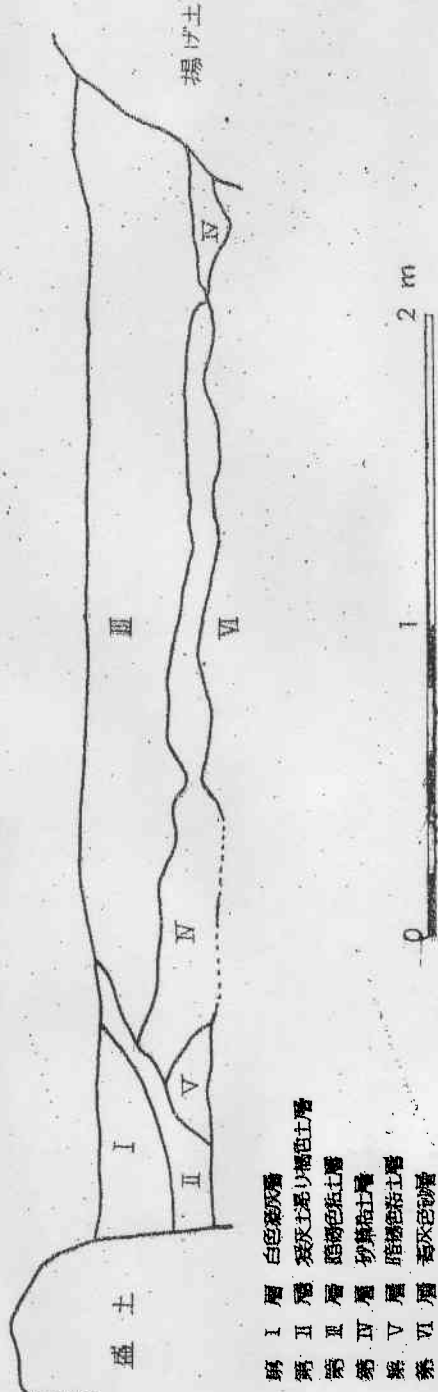
炭化物混り及の分布範囲
土師器片



守城岡 寺野原清水町小川田 發掘用 下層遺跡 ト 1/4 1974.4.5



- 第 I 層 表土
- 第 II 層 褐色土層
- 第 III 層 褐色土混り白色凝灰層
- 第 IV 層 白色凝灰土層
- 第 V 層 赤色粘土混り砂質土層
- 第 VI 層 暗褐色粘土層
- 第 VII 層 砂質粘土層
- 第 VIII 層 青灰色砂層



- 第 I 層 白色凝灰層
- 第 II 層 凝灰土混り褐色土層
- 第 III 層 暗褐色粘土層
- 第 IV 層 砂質粘土層
- 第 V 層 暗褐色粘土層
- 第 VI 層 青灰色砂層



宮城県栗原郡高清水町小山田字萩生田下田遺跡 トレンチ断面 1974.4.5 S. MIYAKE, N. SATO and T. KONNO



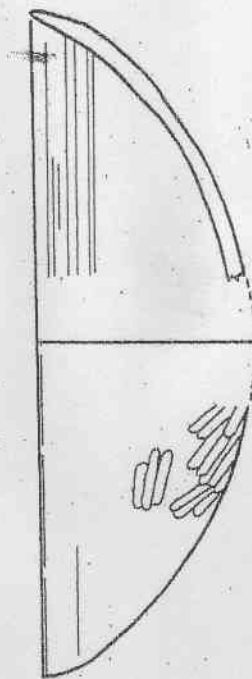
1



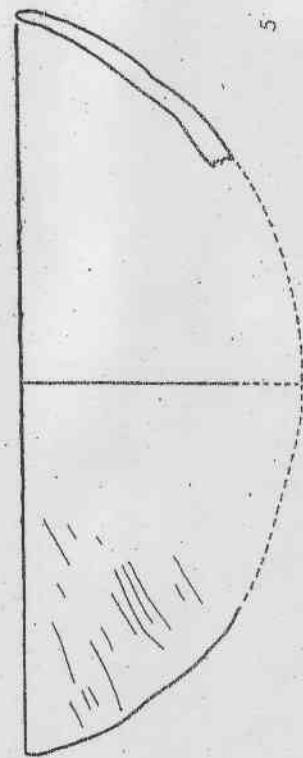
2



3



4



5

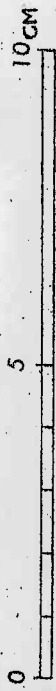
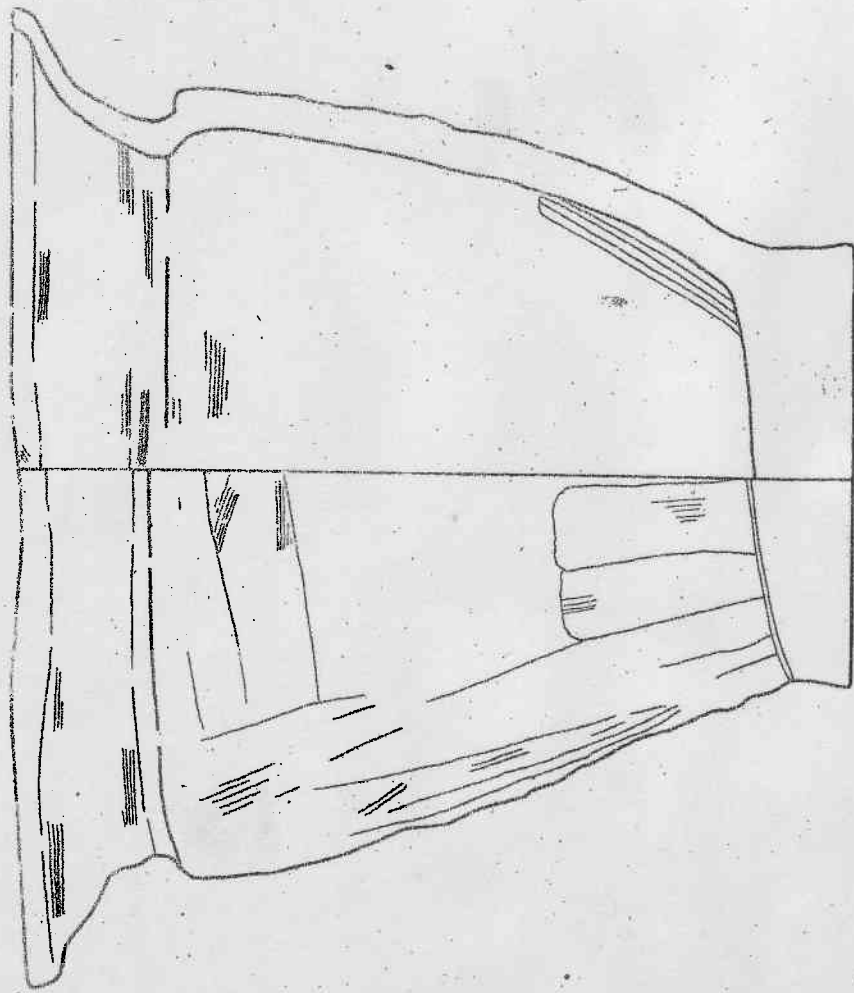
須臾 坏蓋 縮尺ノ
 須臾 坏蓋 縮尺ノ
 須臾 坏蓋 縮尺ノ
 土師器 高台付坏 縮尺ノ
 土師器 坑 縮尺ノ
 土師器 坑 縮尺ノ
 土師器 坑 縮尺ノ



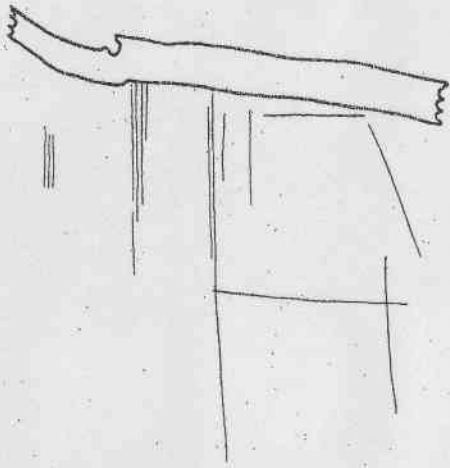
6



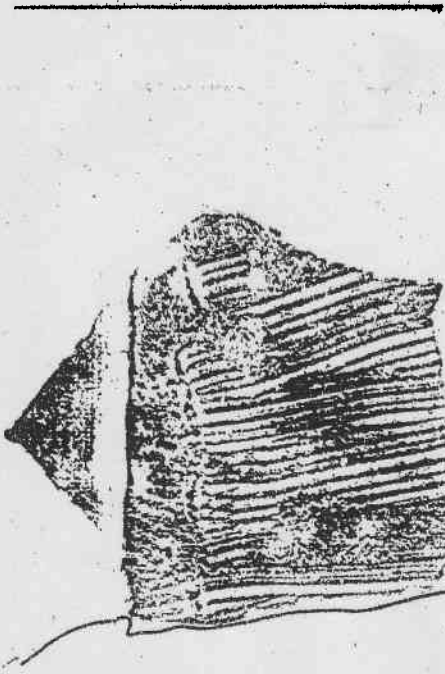
7



宮城原藏原新越清水田小山田曾狂生田下田14番地出土
土師器 小形甕 1994.4.16. 美濃 MUYAKE



須磨園土師居 贅



宮城原栗原郡高清水町小山宮孫生田下田14番地土
 家利 MIYAKE 1974. 4. 16 原寸大

下田遺跡発掘調査概報

この概報の執筆と編集は三宅宗議が担当した。

1. 遺跡の位置

この遺跡は宮城県北部、栗原郡高清水町小山田字^{タカノ}茂生田下田1番地にあり、下田遺跡と併する。

その位置は、高清水町の西部丘陵のひとつ・小山田丘陵の南側にあり、小山田川の北側に形成された沖積低地の中央にある。国土地理院発行万石分の1地形図「岩ヶ崎」の右隅、「茂生田」の地名の見える付近である。

下田遺跡に至る経路は、国道4号線沿いにある国鉄バス陸前高清水駅から、真山行宮城交通バスで西方に約4キロメートル入り、茂生田停留所付近から耕地と南に500メートル下ったところから遺跡がある。この遺跡の南方約500メートル付近を東北縦貫自動車道の予定路線が走り、その東南方の手取丘陵には平安時代の手取遺跡がある。

2. 調査の体制

発掘期間 昭和49年4月3日より同月4日まで二日間
調査主体 宮城県高清水町教育委員会教育長 渡辺沢全
調査担当 宮城県古川工業高等学校教諭 三宅宗議

調査員

高清水町談話編纂委員 森屋謹吾
栗原郷土研究会委員 佐藤信行

宮城県築館女子高等学校教諭 金野正

宮城県古川工業高等学校教諭 加藤隆夫

宮城県古川工業高等学校生徒 森屋知次

調査担当 高清水町教育委員会事務局 千葉幸雄

3. 調査に至る経過

この遺跡は土地基盤を整備中に発見された。

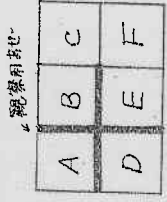
昭和49年3月29日、土地所有者高橋寛氏は苗代のみせを造るため、水田の泥土を掘削したところ、泥土中に土器が現われ、これらを発見した。氏はこれらに、この事実を森屋謹吾氏に通報。森屋氏は現場に赴いて土器の出ている区域の保存を図り、その旨を当教育委員会および佐藤信行氏に報告した。佐藤氏は三宅と共に翌30日と4月2日、現場を踏査し、その区域が埋蔵文化財を包蔵する遺跡であることを確認した。また当委員会において、佐藤氏らの現地調査に立会って、その区域が遺跡であることを確認した。

この遺跡は、関係者の努力によって、発見時の状態が保持されているが、遺跡を含む一帯が共同苗代の予定区域にあるので、遺跡の現状維持は農作業に不便を来し、耕作者からも早急な善後策が要望されていた。

当委員会として、遺跡のかかる維持はこれ以上困難であると判断したが、一方、何ら調査を加えず水田下に埋没させることも適当でないと考えたので、遺物出土区域を含む水田ヌタ平方メートルの範囲について緊急に行政発掘を実施し、遺跡の記録保存に努めることにした。これについては宮城県教育庁文化財保護課調査第一係長氏家和田氏、同課調査係技術士佐々木茂樹氏の指導を得、また関係方面の了解、協力を得られたので、ここに当委員会が発掘主体となり、発掘担当を三室に依頼して発掘調査を実施したものである。

4. 調査の概要

調査の目的は、遺構の検出と土層の把握に置いた。当初の表面観察では、水田の約二平方メートルの範囲に土部器片が半水没状態で露出していたので、一見、遺跡の規模は小さいようであった。しかし、この範囲は深く掘削されているので、本来の遺構が破壊されて現出したものとも考えられ、下田遺跡の遺構はこの二平方メートルの範囲外に及ぶことが想像された。



北西-南東に二メートル、北東-南西に二メートルの長方形の発掘区域を設ける。この区域は森屋氏が掘りかためて応急的によせで区画していたものである。この区域を更に約二メートル平方に区切つてA地区以下、B地区、C、D、E、F



発掘区域模式図

の6地区とした。しかし日糧のついで、遺物の露出してあるA地区とそれに隣接するB地区、D地区に調査の重点を置き、それらの地区の境界は約二センチメートル幅の土層観察用おこしを設けた。

(1) A地区の発掘にあつては一つの仮定を立てる。

発掘前の表面観察では、白色凝灰土と赤色粘土混り砂質土との境界が直線的であり、かつ明瞭であった。その上、白色凝灰土は堅く、赤色粘土混り砂質土中には前記の遺物が見られるので、白色凝灰土に推し込まれぬ遺構の存在を想定したのである。

赤色粘土混り砂質土の輪郭線はD地区方向に約二メートル延び、D地区で外反して更に二メートル延びていた。またD地区では、観察用おこしを境に赤色粘土混り砂質土がなくなり、暗褐色粘土に変わっている。従つて、赤色粘土混り砂質土の輪郭線が遺構の範囲を示すとした仮定は留保されることになった。

(2) 白色凝灰土をブロツクの堆積土と仮定して調査を進める。

発掘地域の東南方向に二メートルの所に灌漑用水路の土手面がある。ここでは白色凝灰土がブロツクで堆積しており、耕作者の跡では同様の堆積土が各所にあるらしい。発掘地域における白色凝灰土もブロツクの堆積土と仮定したが、他の土層、特に遺構との層序関係が不明なので、D地区南西隅の白色凝灰土を分離した。層位約一センチメートルで砂質粘土層に達し、顕著な湧水が

ふる。白色凝灰土は二次的堆積土である。固くしまり、吸水性が高い。

(3) D地区において層序をつかむ。

白色凝灰土層と前記の暗褐色粘土の性格、および両層の層位関係を知るため、土層観察用区々のD地区側断面を掘り下げてみる。この際、白色凝灰土層がせり上る形で暗褐色粘土層に覆いかぶさっていることがわかった。この堆積状態は人為的の字工作用によるのではないと思われるが、その成因については理解しがたい面もある。また、暗褐色粘土層には遺物が包含されておらず、この土層の堆積状態にも人差のきもみが見られない。

(4) A地区、B地区において赤色粘土混り砂質土の輪郭線を追ってみた。

赤色粘土混り砂質土は、遺物も含まれ、A地区の平面ス分の1を占め、B地区にも広がっているが、A地区南隅で、前記の暗褐色粘土と接して、ほぼ直線的な境界をつくっている。そこに遺構の輪郭線を仮定して削平してみれば、境界はB地区に入り、そこから不明瞭となった。

(5) A地区において遺物の分布状態を見る。

遺物は発根地域全面に分布することがなく、A地区の赤色粘土粘土混り砂質土層中からのみ出土している。A地区におおむね出土状態をみると、これも全面に散在することがなく、白色凝灰土に

に接する小範囲に集まる傾向がある。しかしその状態から人為的設置を想定することはできなかつた。遺物はほとんど土師器で、その製作時期もごく限られた時期のものに思われ、また微小な器物と灰も付近にみられたが、個々の土器片の出土状態に人工的な慮を見出すことは不可能であった。

遺物の包含層は、赤色粘土混り砂質土層の表層から深さ1メートルの層厚を示していた。

(6) A地区の白色凝灰土層下に遺物包含層を仮定して、白色凝灰土層を剥く。
遺物を包含する赤色粘土混り砂質土層と白色凝灰土層との層位関係は、観察用あぜの断面にはまだ出ていなかったが、A地区で遺物の包含状態を追ううちに、一部の土師器が白色凝灰土層下に食い込んでいくことがわかった。白色凝灰土層と須恵器片散見との結果、白色凝灰土層直下から土師器片多数と須恵器片散見および砥石が出土し、炭化物混りの灰も出土した。しかし湧水と日限のため精密な調査をすることができなかつた。

(7) A, B, D, E各地の層序を見る。

遺跡の性格、遺構の存在がわからぬまま、日限のため、水東の線、石の線の変直下で観察用土層断面の堆積状態を見た。各地の層序は付表に示した通りで、遺物包含層は水系の線ではA地区、V層のみ。B地区V層はそれと同一層層でありながら遺物を

5. 出土遺物

出土遺物の層位別の出土状況は下表の通りである。

土層 (A,B地区)	種類		土師器		須恵器		磁器		備考
	器種	数量	形状	数量	形状	数量	形状		
第I層	埴輪	1	丸	1	1	1	1		
第II層	土	1	丸	1	1	1	1		
第III層	土	1	丸	1	1	1	1		
第IV層	土	1	丸	1	1	1	1		
第V層	土	1	丸	1	1	1	1		
第VI層	土	1	丸	1	1	1	1		
第VII層	土	1	丸	1	1	1	1		
第VIII層	土	1	丸	1	1	1	1		
第IX層	土	1	丸	1	1	1	1		
第X層	土	1	丸	1	1	1	1		
計									

出土遺物中、土師器の遺存状況は概ね不良で、ほとんどが片断である。割れ口が古く磨滅したものや器表面の磨滅したものが多いので、接合可能な土器は少なく、接合した土器でも欠失部が多い。

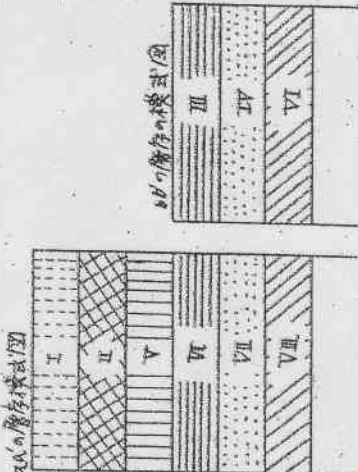
(1) 土師器

埴輪、甕が出ていたが、各々特記すべき事項が少なく、少くもあるので、埴輪、甕をそれぞれについて一括して記す。

a) 埴

一列を除き打点である。埴輪のニール・ニール・ニール

含まない。また水糸も以線ではA、B地区のV層に相当する土層が無く、遺物包含層はない。なおA地区第II層下部から若干の土師器片が出上したが、その一部は第V層の土器と接合するもの、第II層下部を被さる遺物包含層と認めらることは困難であろう。



aa, Ⅲ-Ⅳ = bb, Ⅰ, Ⅱ (図示せず)
 aa, Ⅴ = bb, Ⅲ
 aa, Ⅵ = bb, Ⅳ
 aa, Ⅶ = bb, Ⅴ
 aa, Ⅷ = bb, Ⅵ
 (aa, Ⅴは遺物包含層またはaa, Ⅲ, Ⅳ層はaa, Ⅵ層とbb, Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ層に相当する)

次に、水糸のA線の層位と水糸のB線の層位の相互関係を右に図示する。相互の異同関係は土層の色調を主として把握して示す。

(2) 遺物の有無

水糸のA線下の層位で注意されるのは第V層の落ち込みで、これは第VI層およびVII層(一部)を切っている。このことはV層がVII層およびVIII層が形成された後につくられたことを推測させる。V層が遺物包含層であることもこの際注意される。なお、A線V層の各段には特別の遺物がみられず、土層もまたV層の上から出るのみで、層の下半に及ばない。一方、V層中で土器、炭化物等の出土したしつぱる遺物の表面と見なすこともできず、その脆実なことは不明であり、この遺物自体の性格を見定めることも不可能である。よって遺物包含層を確認したはらとすべき。

底部と底部の境界が段をなすもの、一本の流線線で区別されているもの、および何ら境界を示さないもの三種類がある。境界のない丸底杯でもへうけ使用の点で底部底部の境は大體判別でき、この手の杯は境付近がわずかにくぼんでいて、内部は口縁付近へうけヨコナデ、以下は不定方向のへうけのみで、黒色処理をしたものとはしないものがある。内面に底部底部の境界を示す杯は極めて少ない。底部は外側に直線的に立上り、口縁に至る。平縁と思われ、杯は推定口径11.0cm、推定器高3.0cm強のもの、他の杯算底部の立上り角度が多い。内面へうけヨコナデ。底部はせや上げ底気味であるが調整技法はわからない。

b) 碗

口径に比して器高の数値が割合高いものと碗として一括する。製作技法は杯と同じである。丸底、黒色処理が内面だけと全面に及ぶものとがある。内面へうけのみ、表面は底部がへうけヨコナデ、底部不定方向へうけ、底部底部の境界を明瞭に示すものは少ないが、ます段はいしー線も有するものであろう。碗界を示さない碗でもかすがにへうけでいるものがあり、そへが推定できる。

c) 甕

ほぼ復原でき九一点を除き、全て口縁部または底部の破片である。ほぼ甕形の甕の器形は、底部からほぼ垂直に立上り外下向きにゆるやかに傾斜していき、内面に木目の刻線が数センチ

急に外反して口縁に達する。底部は縦直にへうけケズリ、角部、角部一部横直にへうけケズリがあり、口縁部はへうけ横ナデである。底部は斜縁蓋しく技法等がわからない。口径15.6cm、器高7.0cm、器高12.5cm。その他の甕の破片は、口縁部のもは上記の甕とほぼ同じ器形を示すが、底部に刷毛目がある。長胴の甕である。底部破片は木の葉文を刻すものとへうけ切りのものがある。尚土師器の長胴甕の器形で焼色が堅く復原器の焼成を示す口縁部破片が出土していることを付記しておく。

(2) 須恵器

a) 坏蓋

坏または塊の蓋を一括して坏蓋としておく。口縁部は丸底、丸底でわすかにカエリがある。ツマミの形状はわすかに丸底、丸底から推して偏平か、擬宝珠状小突起のわすかに見える偏平なもの仲間であらう。

b) 高台付坏

坏の高台部分のみ、ほぼ垂直に立ち端部は水平である。器形のわすかに付いたものと思われる。

(3) 磁器

白磁の塊と思われる小片が一個出土している。

(4) 石製品

磁石一個出土している。四面体の不定形な磁石のものを上層下層を念々木面が磨滅している。内一面に木目の刻線が数センチ

り、他の一面には細い茶泥が多数走っている。材質は泥岩と思われ。

6. 小結

下田遺跡は遺物包含層である。その性格は遺構面から推定するに困難だが、A地区の遺物包含層である第V層は第IV層と第IV層の一致と見切れて落ち込んでおり、何らかの遺構のあったことを推定せざるを得ない。発掘区域を拡大し精査したならばこれを知らぬことではなからう。

出土遺物は土師器、須恵器、磁器と思われ、それには磁石であり、土師器には埴、埴、甕、須恵器には甕、埴蓋、高台付埴があり、磁器(?)は白磁の埴(?)である。磁石は面に走る条痕から金属器の研磨に用いられたであろう。

出土遺物中、土師器の出土量多く、中でも埴、埴が多い。須恵器は4点、磁器(?)は1点と極めて少ない。これらの土器類は小破片となり、出土しただけで復原可能はほとんど少ないが、器形、製作技法の特徵については認識することができ。

土師器の埴、埴は伊豆半島の区界を越え、北は洗線も有るものがあるが、これは伊豆半島に属し一部洗線へも、は国分寺下層工式に相当するであろう。区界を越えぬ埴、埴も丸底なので、国分寺下層工式期まで下るまい。国分寺下層工式-II式とみられ、平底釜の埴も国分寺下層工式としておきたい。

埴については、別頁に白土師器に在るもの、付随式、黒土師器

をへうケズリし丸胎定形の埴は国分寺下層工式と推定される。本葉の底面のみは土器の須恵器と相違なく見られる。土師器の器形と須恵器の埴を区別するも、須恵器と相違なく見られる。須恵器は国分寺下層工式の製作、使用年代については、形式区分や編年の位置づけに若干の問題があると思われ。ここでは検討するだけの資料がないので、通説におおむね従うこととする。須恵器は9世紀前半中心、国分寺下層工式は9世紀後半代である。

須恵器は高台付埴の高台部分の踏んぱりが強くほとんど重直な断面の及りもないので9世紀代、埴蓋もつまみの形状推定にやや不審があるが9世紀初頭を廻りえないと思われ。

以上の土器の年代観からすると、下田遺跡の遺物包含層は9世紀代の遺物を包含し、9世紀を廻らざる時期に形成されている。土師器と須恵器の相違年代にはほとんど区別がつかないところから見れば、この遺物包含層は9世紀後半代を主として下層工式時期に形成されたと言えよう。ただ、丸底の埴の形成された原因については、土師器に問題するべくもあって、不明というほうがよい。

以上